九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[012]ICER Newsletter

https://doi.org/10.15017/1807629

出版情報：ICER Newsletter. 12, pp.1-, 2014-12. 九州大学附属図書館付設教材開発センター
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

No.12 2014.12

九州大学附属図書館付設教材開発センターだより

ICER Newsletter

MOOC「Global Social Archaeology」開講を終えて
九州大学初のMOOC制作・開講とその成果

教材開発センターが制作に取組み、JMOOC から公開した MOOC（大規模公開オンライン講座）「Global Social Archaeology」が、10 月 23 日、無事に受講期間を終了しました。本講座は、考古学とはどのような学問か、現代社会の様々な問題とどのように関わっているかを、より多くの皆様に学習いただくことを目標としました。映像コンテンツを学内で制作することでより授業の内容が伝わりやすい映像表現を模索し、また、英語講義に日英字幕を付けグローバルな講義を目指したことが特徴です。

受講登録者数は 799 名で、日本を含めて世界 53 ヶ国から幅広く受講いただけました。修了率は 27.8% と、これまで JMOOC で開講された講座で最も高い数字となっています。また、ディスカッションボードでも活発な議論が行われました。以上の受講結果から、多くの学習者の皆様に、それぞれ自分なりの高い問題意識を持って受講いただけたことがうかがえます。

教材開発センターでは、今後も高品質なビデオ教材の制作、公開、運用に取り組みます。

【谷澤 亜里 (学術研究員)】

Global Social Archaeology(グローバル社会考古学)

JMOOCから英語講座として、2014年9月25日に開講。講師は、世界考古学会議（World Archaeological Congress (WAC)）会長の溝口孝司教授（九州大学比較社会文化研究院）と、WAC 前会長のクレア・スミス教授が担当。講義は 3 パートからなり、それぞれ 15 分程度の動画で構成。講義が進むと課題が出題され、学びを深めることができる。また、受講者がディスカッションできる学習コミュニティも用意されている。一定の修了条件を満たすと修了証を取得することができる。

「日本史学・宮中儀礼に関する対話型電子教材の開発」プロジェクト

現在、教材開発センターでは、人文科学研究院の坂上康俊教授と共に宮中の儀式を再現する教材の開発に取り組んでいます。宮中の儀式の様子を紙の媒体だけで学習するのではなく、3次元 CG アニメーションや3 D プリンターで出力された建物のモデルを見ながら学習することで、学習内容をより深く理解ができ、学習対象に興味を沸かせることができるようになると考えています。3次元 CG アニメーションで表現するために、種々の故実書や論文等から情報を収集し内容の精査を行いながら、その時代の紫宸殿・陣座・清涼殿といった建物の形状モデル作成を坂上先生と研究室のスタッフ・学生と協働で行っています。写真はその一場面です。登場人物の動線や振る舞いについても順次データ作成を進めていきます。当該の教材は、Web コンテンツとして開発し Web 上で公開できるようにする予定です。完成までどうぞご期待下さい。

【岡田 義広 教授】

Web学習システムで試験を行なうには

【準備】

Web 学習システムでは、受講者に試験を課せます。「コンテンツ」に教材を置いている場合には、「アセスメント」から「テスト」を選択し、「作成」→「送信」をクリックします。テストの説明を入力する画面で、テストの「名前」を指定し、さらに「説明」、「手順」を必要に応じて入力します。次に「質問の作成」にカーソルを持って行くと図1に示すようなテストの種類を選択できます。ここでは「穴埋め問題」を選択し、図2のような画面で問題文と解答を書きます。解答は部分一致、完全一致などを選択できます。「送信」をクリックして問題を登録し、必要に応じて点数を設定し、「OK」に続けて「送信」をクリックします。「テストオプション」の画面で問題を表示する時間、解答可能な時間などを設定します。「リンクを利用可能にする」をチェックしないと学生から見えません。これで問題の準備は完了です。

図1　テストの選択

図2　穴埋め問題の入力画面

【採点】

学生がテストに解答すると穴埋め問題では自動採点が行なわれるので、教員は特に採点をする必要がありません。

【成績】

画面の左側の「成績センタ」から「テスト」を選択すると、例えば次の図3に示すような結果が表示されます。

この例は 2014 年度の情報科学系の授業で出席確認にテストを使っている例(教員が講義室で受講生に解答の1文字を口頭で伝える穴埋め問題)です。

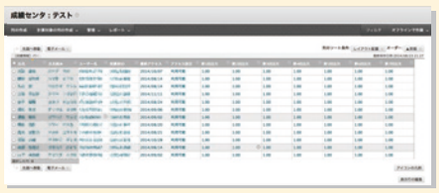
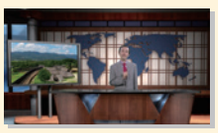


図3　成績の表示例

【藤村 直美 教授(教材開発センター長)】

撮影の現場から ～機材紹介 映像スイッチャー編～

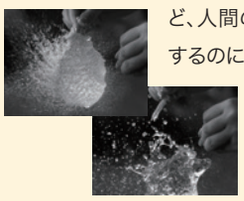
教材開発センターのスタジオには、米 NewTek 製オールインワン ライブスイッチャーシステム TriCaster 860 が導入されています。この映像スイッチャーは、最大8台(常設3台)のカメラ映像や、写真、動画、パソコン画面などの取り込みが可能です。同時に、映像を切り替える際の手法も多様にあり変化のある動画を制作できます。また、8つの映像を同時に合成することも可能で、プレゼン資料やバーチャルスタジオセットを活用した動画も簡単に制作できます。本システムはライブシステム仕様に対応しており、事前に準備をしておけば、時間のかかる編集などの作業工程をなくし、効率良くその場で完成品に仕上げたり、Ustream に生中継を行うことも可能です。教材開発センターは、皆様のご要望を具現化し、アイディアや手法を提案しながら様々な映像コンテンツ制作をサポートしてまいりました。引き続き、皆様のご期待に応えるべく、質の高いコンテンツ制作を目指してまいります。誰をも魅了する映像コンテンツを制作してみませんか。



【稲田 環(テクニカルスタッフ)】

次世代の教材開発を支える技術 ～その4 ハイスピードカメラ～

今回紹介する 2D/3D 教材開発システムは、「ハイスピードカメラ」です。この装置は、現実世界の動きをスローモーション映像として撮影することが出来ます。ハイスピードカメラは、一秒間に数千枚の写真を連続して撮影することで、スローモーション映像を作り出します。例えば、水風船がはじける瞬間を、一秒間に 3000 回カメラのシャッターを切って撮影するとします。すると、水風船がはじける様子の連続写真が 3000 枚できあがります。これらの 3000 枚の写真を繋いで、一秒間に 30 枚の絵が切り替わる映像として出力すると、実際の速度の 100 分の 1 の速さのスローモーション映像が出来上がります。ハイスピードカメラは、昆虫の羽の動きや物体同士がぶつかる瞬間の映像など、人間の肉眼ではとらえることが難しい映像を撮影するのに適しています。ハイスピードカメラを利用して電子教材を開発してみたい方がいらっしゃいましたら、是非私達と一緒に教材開発をしてみませんか。ご連絡お待ちしております。



【金子 晃介 助教】

大学 ICT 推進協議会年次大会に出展します

大学ICT推進協議会 (AXIES:Academic eXchange for Information Environment and Strategy) は、「高等教育・学術研究機関における情報通信技術を利用した教育・研究・経営の高度化を図り、我が国の教育・学術研究・文化ならびに産業に寄与する」ことを目的として設立されました。会員ならびに国内の高等教育・学術研究機関間での情報交換の場として、年に一度年次大会が開催されています。年次大会は、2011 年に第1回が開催され、今回の 2014 年度年次大会で 4 回目の開催となります。

教材開発センターでは今回、ブースを出展し、9 月に開講、10 月に受講期間が終了した JMOOC 講座「Global Social Archaeology」についてご紹介いたします。

開催期間　平成 26 年 12 月 10 日(水)～12 月 12 日(金)　　場所　AER（アエル）ビル内【JR 仙台駅西口北側すぐ】

編集・発行:九州大学附属図書館付設教材開発センター　info@icer.kyushu-u.ac.jp
Copyright(C) 2014 Innovation Center for Educational Resource. All rights reserved.